

美術館建築の変遷にみる展示空間システムと自然光の作用に関する研究

教育デザインコース 美術領域
高橋 志緒

1. 研究背景

素描の制作において、「空間」という概念を様々なアプローチから作品に取り込むことにより、鑑賞者が作品との間に「存在と時間」を共有し、それを認識し得るような「現代美術としてのデッサン」という新たな価値成立の可能性を探っている。

今回の発表内容はこうした研究の一部を構成する「展示空間システム」について、主にフィールドワーク調査を通じて考察したものである。

2. 発表内容

本研究に取り組むにあたっては、まず美術館建築の変遷をたどる調査を行ない、その調査結果を「ルネサンス期以降の美術品コレクションタイプ」として大きく4つのタイプに分類した。分類の基準としたのは、その所蔵者と収蔵目的である。ポスター(図1)中央左には、調査結果に基づく4タイプの詳細を時系列でグラフに示した。

つぎに、上記分類に対応する代表的美術館およびフィールドワーク対象の美術館リストを同ポスター中央右に表し、展示空間システムの特徴ごとに「3つの世代」としてさらにカテゴリー分けをおこなった。ここではとくに展示室内の窓や自然光の作用に着目し、成立年代順に「第一世代 神殿型」、「第二世代 ホワイトキューブ」、そして「第三世代 リノベーション型」とした。

第一世代は、特権階級的美術コレクションで構成され、「美の殿堂」などと喻えられる古典主義的美術館建築をさす。通常、西洋の神殿型は展示空間に自然光を取り込む。一方、日本の同型はそれを完全に遮断し、仄暗い空間を作る特徴がある。これは、西洋と日本の間に「神聖さ」が求める美意識の根本的な違いがあるためだと考察した。

近代に入り美術品の所蔵者と展示の公共性が増すとともに、抽象化する絵画・彫刻にふさわしい展示空間として誕生したのが第二世代である。



図1 当日のポスター

ここではB.オドハティによるホワイトキューブの定義や、同時期におこった現代作家たちによる美術館批判問題を取り上げた。

現代作家の主張を最も反映した第三世代は、既存建造物の改築などにより自然光を積極的に取り込む展示空間をいう。鑑賞者と現代作品との間に「いま」と「ここ」を共有・認識するための装置として作用する窓と自然光であると考察した。

発表の最後に、展示空間システムの発展をポスター右下にグラフで示し、今後鑑賞者主体のシステムへと変わっていく可能性について言及した。

3. 実施報告

質疑応答の時間では、本研究を続けていく上で方向性をより明確にする必要性を認識した。今後の研究に反映していきたい。